

文庫本『津軽』との旅



「知の回廊」

- 心の王者 - 太宰治の津軽を歩く

取材ロケレポート

中央大学

渡辺純一

序章（プロローグ）

太宰治は、私のなかでは暗いイメージしかない。『斜陽』や『人間失格』という作品は、その出だしだけしか読んでいない。そして何より玉川上水への入水自殺は、どう考えても好きになれなかった。自分が呑気な性格というか鈍感というべきか、とにかく太宰の暗く感じられる繊細さは、全否定していたのである。その太宰が、何故人気落ちることなく現代に至るまで読み継がれているのか、私には理解できなかった、いや、したくなかったのかもしれない。

渡部先生は、「太宰は若者に好かれ、年齢のいっている人にはあまり好かれられないことが多い。」と言っていた。私の49才という年齢は、実際「年齢のいっている人」に分類されるようである。小説にも対象年齢があることをあらためて知り、少々驚きながらも、自分の年齢の重なりを微笑み少しがっかりした。なぜ「年齢のいっている人」に人気がないのか。「心中」という何とも後味の悪い死に方のなせる業なのか。ところが渡部先生は、太宰の明るさ優しさ、そして「人を喜ばせるのが何より好き」というフレーズを何度も繰り返すのである。お陰でほんの少し、気持ちが動いた。『津軽』を読んでみようという気になったのである。もしかしたら、食わず嫌いなのかもしれない。

太宰のもう一つの面を見つける旅、それが今回の旅の目的になったのである。旅を始めるにあたって、私はもう一度何も考えずに太宰と向き合ってみることにした。もしかしたら、好きになれるかもしれないと思った。そのためには30分で行ける三鷹へは向かわず、直接津軽を目指したのである。番組では三鷹から始まり、三鷹で終わっているが、これは私の移り行く気持ちの変化をディレクターのSさんが順序だててくれる形に構成してくれたからである。（既に太宰と同じようにSさんと頭文字を引用している。）



太宰治 入水地（三鷹）

旅の重さ

前年、『宮沢賢治の故郷を訪ねて』という旅を今回同様、渡部先生とさせていただいた。もちろんSディレクターも一緒だった。もの作りの楽しさは知っていたつもりだったが、テレビ番組を作るというのは、今までまったく経験がなく、それだけに力が入っていた。旅先ではいろいろな所を見てまわり、そして経験をした。賢治の神秘性と人間の部分に触れ、友人である高村光太郎の人柄を垣間見た気もした。そして、岩手の大らかな自然を存分に感じ取った。しかし、「人」とは出会わなかった。その後の番組視聴者とのツアーでは、いろいろな人に会い、地元の「人」とのふれあい旅も楽しんだが、取材ロケでは人の顔が見えてこなかった。賢治の作品のせいなのか、それとも自然が大きすぎたのか。

「次は太宰でしょうかね。」ロケのメンバーの誰からともなく出た言葉であった。私自身は、太宰か！と少々気が引けた。それは前述の理由からである。渡部先生が、私の気が乗らない感じを察したのか、太宰の「人を喜ばせるのが何より好き」というフレーズを説明して下さった。ほんの少しだけ納得した、いや、して見せたという程度だったかもしれない。しかし、テーマは「太宰」と確定したのである。そして私自身、初めて太宰と真っ正面から向き合わざるを得なくなったのである。私は津軽を旅する前に、太宰という人間の歴史年表を覗いてみた。それによると、太宰と賢治とは似たような経済的な境遇から出発し、同じように若くして亡くなっている。と言うよりほぼ同じような年齢で亡くなっていたのである。渡部先生の話によれば、太宰が賢治の亡くなった39歳前後を非常に意識していたというのである。『津軽』の本編にも幾人かの作家の名前（賢治は見当たらないが）と亡くなった年齢が書かれている。確かに近い年齢で亡くなっている。太宰の本当の心情を計り知ることは出来ないが、彼が生と死を常に頭に思い描きながら、屈折した自分自身をとことん素直に表現する「心の表現者」になりたかったのではないかと思うようになったのである。

この旅は、重い旅になってしまうのであろうか。それとも心晴れ、弾む旅として終わることが出来るのか。「心の王者」を目指した太宰治とは、一体どんな人間だったのか。彼の本当の心が見てみたい気持ちが生まれたことで、本屋の棚に並ぶ小説『津軽』に手が伸びたのである。

旅の始まり

ジェット機は、よく晴れた岩木山の東部をゆっくり高度を下げ、まだとても新緑とは言えない雑木林の中に突如現れた滑走路へ着陸した。青森空港である。東には、かつて若い頃、自転車で駆け上った八甲田の峰峰が、「また来たのか！」と私を迷惑そうに出迎えている感じがした。まだ気持ちが乗りきれていないのだろうか。空全体がやけにモヤッた感じに見えたのである。私は一人で青森の駅に向かうバスに乗り込んだ。渡部先生は、既に前日青森に入り、深浦にある銀杏の木の写真を撮りに出掛けている。撮影隊のSさん夫妻は、今ごろ自動車に器材を満載して高速道路を青森に向けて走っていることであろう。バスは転寝ができるほどの時間で青森駅に到着した。約束は12時、まだ一時間半ほど時間がある。私は駅前の市場を探した。昔は古びた建物の中に、いろいろな海産物を売る店がところ狭しと並び、北海道からの旅の帰りには、よく身欠きニシンを買ったものである。ところが当時の建物は既に無くなり、近代的なビルの地下に海鮮市場が残っているだけらしく、残念と同時に少々ほっとしながら地下へ向かう階段を降りて行ったのである。ところが、そこで見た市場は、身欠きニシンを買い込んだ頃ののままの風景であった。場所や建物は新しくなっても、売っている人達の心は、まだまだ変っていないという、何とも言えない嬉しさと懐かしさが沸いてきたのである。立ち寄って良かった。今日は少々奮発して帆立とシャコを家内や子供たちに送ろう、もちろん身欠きニシンも欠かせない。

待ち合わせ場所は、港の近くにあるアスパムという建物の上階のレストランと決めていた。「待ち合わせ場所としては申し分ないが、それぞれが集合時間に集まれるのだろうか？」という多少の不安を押し殺しながら、私は少し早めに（30分以上早く）アスパムに到着した。当然一番であった。あまり人を待たせるのは好きではないので、どうしても早目に行くことが多い。これは性分かもしれないが、この時ばかりは、帆立やシャコを目の当たりにして、お腹が空いていたからだろう。旅では食べ物も大切な道連れである。早速、ランチを注文した。「魚になさいますか？それともお肉になさいますか？」標準語である。「魚にして下さい」。このレストランは、店全体が一時間近くかけて回転する動くレストランで、食事中に町の風景と海の風景をゆっくり楽しませる趣向なのだ。一応、洒落た店を装っているのだろうが、私は酔ってしまいそうになった。食事中に地面は動かなくていい。

食事が運ばれてきて食べ始めた頃に、S夫妻が到着した。Sさんの奥さんとは初対面である。コンサートなどの音響の仕事をしていると聞き、ご主人が映像、奥さんが音響、専門は違っても夫婦で多少なりとも関連したクリエイティブな仕事が出来るとするのは、羨ましい限りである。私もこんな風に、物作りを家内と一緒にやってみたいと思っていた。こんな気持ちが伝わったのか「実を言いますと、今回、この人は私が給料を払ってAD（アシスタント・ディレクター）として雇っているんです。」とSさんは奥さんを見ながら笑って話した。夫婦でもシビアなのか、それともこの番組の資金不足のせいなのか、申し訳ないね、Sさん。仕事とはいえ、せいぜいロケの旅を楽しんで欲しいものである。「家内はサケがだめなんですよ」Sさんがランチの魚を見ながら言った。「前世はサケだったんじゃないの？」などとばかな話をしていると渡部先生が到着。どうにか巡り会うことができた。こうして、いよいよ「津軽ロケの旅」は始まったのである。



アスパムでの昼食

青森の町並み

青森空港に降り立った時、やけにモヤッとして埃っぽいと感じたのは、中国大陸から飛んできた黄砂の所為だった。この黄砂が実は後で出てくる竜飛岬に大変な影響を及ぼしているかわかり、愕然とすることになる。展望台のガラス窓は黄土色に汚れ、外側から掃除が行われていた。掃除が完了した所を選んでカメラを設置し、青森の町並みの撮影が始まった。「あの辺りが太宰が住んでいたところで、その港で弟と赤い糸の話をした所…」渡部先生の説明が始まった。と同時に今回の旅が本格的に始まったことを実感したのである。少しぼやけた快晴の空の下、はっきりとした青色の陸奥湾と薄墨色の八甲田山、そしてそれらに挟まれた青森の町並みがカメラの中にしっかりと納められ始めた。目を凝らすと遠く微かに岩木山が、「俺はここにいるぞ！」と存在を示していた。

下宿跡と赤い糸の話

太宰の下宿跡は、かつて親戚の家があったところで、一区画海寄りには芸妓達がいる置き屋があったそうである。当時はいろいろな女性が太宰を取り囲んでいたのであろう。学業に励むことも忘れて恋に専心したこともあったようだが、そこにいたある女性との密会の場所が、下宿や置き屋の目と鼻の先であることに、私は少々驚きながら「太宰さん、度胸がいいね」と感心したものである。三脚に固定したカメラを西から東へ振るだけで、その女性の置き屋と密会した料理屋の場所が撮影できるのである。今はその密会の場も駐車場に変身していたのだが。そして、そのカメラを180度反転すると、弟と赤い糸の話をした当時の港跡が視界に飛び込んでくる。賢治の時も感じたことだが、何につけても逸話がある場所の間隔が近いということである。昔の人の距離感が現代の我々と大きく異なっている気がしてならない。今回もそれを感じたが、やはりたった数十年の時の流れで、人が感じる距離の感覚がものすごく縮まってしまったようである。交通機関だけでなく、電話やインターネットのような情報伝達手段の発達は、いつの間にか人間の距離感覚を麻痺させてしまったのではなかろうか。してみると、これから始まる津軽半島一周の旅は、当時の太宰にすれば、現在の何倍もの道のりを味わっているに違いない。私は太宰に羨ましさと少々後ろめたさを感じながらも「赤い糸」という誠実に見える言葉を使う太宰と、その後とても尋常とはいえない行動をする太宰とのギャップに、まだまだ理解できないものを感じたのである。

下宿から太宰の通う学校までには数キロの道のりがあり、我々にとって歩くには少々長い気がするが、当時の交通手段からすれば当然歩く距離なのである。その途中、太宰が堤川の橋の欄干にもたれながら作家の道を歩む決心をしたのかもしれないと思うと、人の一生がほんの小さな曲がり角から大きく変わって行くことを改めて感じる。川面には、少しだけ盛りの過ぎた桜の花びらが、吹雪のように降り注いでいた。「もう数日早ければ、満開の桜だったのに！」という皆の気持ちとはうらはらに、私の中では「太宰らしくていいね」という独り言が頭を巡っていた。「そう言えば、彼が死んだのも桜の花で有名な玉川上水じゃないですか」何か因縁があるのか。生きるための決心をしたのも桜の傍、死ぬ決心をしたのも桜の傍なんですね。これから先、この桜を見ながらの旅になったのだから、何とも不思議だったのである。



堤川

合浦公園

沢山の文化人達の碑が点在する合浦公園。しかしながら、ここには太宰の碑がない。県知事を務めた兄が、自殺するような弟を恥じて碑を立てさせなかったという逸話も聞こえてくる場所である。我々は、桜祭りの混雑の中、駐車場を捜しながら公園に近づいたが、盛りの過ぎた桜の祭りには、ごった返す程の賑わいはなく、手ごろな賑やかさを演出する程度であった。きっと太宰もこの公園はお気に入りだったのではないだろうか。「お兄さん、せめて一つぐらい碑を建ててあげて欲しかったね」そんな愚痴が出てしまうほど素敵な公園だった。

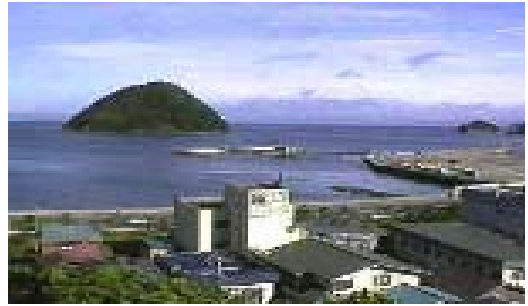


合浦公園から陸奥湾を望む

ここで、渡部先生と私の初めてのツーショット撮影が行われた。公園内はごった返しているとは言わないまでも、多くの人達が我々の撮影を振りかえりながら通って行く。しかし、今回の撮影では恥ずかしさも消え、人の目にも慣れて、結局二人旅を楽しんでいる様子が画面に表れていた。やはり私は旅が好きなのである。撮影が一段落すると、翌日の撮影場所『青森県近代文学館』の場所を確認し、概観を撮影したあと浅虫温泉に向かった。今日の宿泊場所である。と同時に太宰の母と姉が逗留していた場所としても紹介しておかなければならない所である。

浅虫温泉の夕暮れ

浅虫温泉は、かつては湯治場として栄えたようである。しかし、今はその頃の面影はなく大きなホテルが立ち並ぶ温泉地となっている。翌日、小泊にある『津軽』の像記念館のYさんにお聞きすることだが「つばき屋さんという旅館が、太宰が訪れた旅館だということが分かったんですよ」という話を聞くにつけ、その旅館に泊まればよかったと思ったが後の祭りであった。我々は、そのときは陸奥湾に沈む夕日を撮影すべく準備万端整えていたが、水平線近くを雲が覆い結局夕風の海に浮かぶ「湯の島」の景色しか撮影できなかったのである。明日は晴れてくれるのだろうか。賢治の撮影が雨ばかりだったのを思い出してしまい少々暗くなった。「きっと晴れるに決まっている」そう言い聞かせながら、次第に真っ暗になっていく陸奥湾の景色に見とれていたのである。遠く青森市街の灯かりが弱々しく見えた。



浅虫温泉から湯の島を望む

青森県近代文学館

昨日の心配は他所に、絶好の撮影日和となった。我々は早めに出発したものの、浅虫温泉の出口で温泉全体の風景（捨てカット）を撮影することで、文学館の開館時間に合わせた。番組の展開を意識すれば当然なのだが、ナレーションによって状況を説明する時、少なくともナレーターが話をする間の映像が必要になる。これを俗に「捨てカット」と呼ぶそうであるが、必要が無ければ捨てても構わない映像のことだ。実はこの「捨てカット」という言葉自体、私は『知の回廊』の番組制作を始めるまで知らなかった。つまりは業界用語なのかもしれないが、この捨てカットを含めて放送分の太宰の番組1時間分を制作するのに、約6時間程のビデオテープが回ったのである。映像番組作りというのは、とにかく時間と手間の掛かるものであることが想像できるであろう。



青森県近代文学館

さて、こんな道草話をしている間に青森県近代文学館の扉が開いた。「文学館室長のSさんは、どこかの学校の先生だったらいい」と渡部先生はおっしゃっていたが、いかにも地元の方らしい中にもお洒落な感じを受ける人で、津軽の言葉の中に何とも温かいほっとする口調がにじみ出て嬉しかった。津軽に来て最初に親しく話した人がSさんであったことに、この旅の成功の予感がしたのである。案の定、文学館の展示は素晴らしく、青森にゆかりのあるそれぞれの作家が見事にディスプレイされていた。日本各地の美術館や文学館の展示（私はとにかく知らない土地へいくと美術館や博物館、文学館を見てまわるのが好きなので）と比較しても遜色ないどころか、指折り数えられる素敵な展示といえたのである。とにかく色彩が奇麗に表現されていた。やはり「ねぶた」のあの色彩が背後にあるのだろうか。そんな思いで撮影していると、S室長さんが「太宰の直筆のこんな文が見つかったものですから、来週から展示公開する予定なんです」といって見せてくれた。その文字には、何とも言えない力強さを感じたのである。これは私だけの印象だったのであろうか。一つのイメージが覆った。太宰は写真などから感じる以上に、意外に骨太な人間なのではないかと思いはじめたのである。何故なら当時の竜飛岬までバスや歩きで何日もかけて旅をするのである。キャシャな人間では無理だろう。それを証明するような力強い字が目前にあったからなのである。S室長は帰り際、我々を玄関まで見送ってくれた。きっとまた来ますよ。

いよいよ青森を離れ、蟹田へ向かう。当時と同じはずのバス通りを通して小さな村村を過ぎ、右側に時折見える陸奥湾を覗きながら、一時間足らずで蟹田に到着した。



館内展示

蟹田を歩く

蟹田は小説『津軽』に出てくるとおりの町であった。何か物憂い感じがする静かな町で、太宰の親友N君の故郷である。我々はN君の家の前を通り過ぎ観覧山へ向かった。蟹田は東風の強い町であった。太宰はここでヒバの木の紹介をし、リンゴより由緒があることを力説している。確かに観覧山から西に続く山にはヒバが密集しているようだ。我々は、おそらく数百メートルの高さしかないが、結構深そうな山並みを背負いながら、風の強い蟹田の町を眼下にしていた。少しだけ北海道の日高地方の町（浦河）に似ている気がした。「あの家が、先程前を通ってきたN君の家で、あの川が蟹田川」渡部先生の説明が始る。その様子を見ながらSさん夫妻が確実に撮影準備を行い、息の合ったところを見せている。ここにある碑に「人を喜ばせるのが何よりも好き」というこの旅のキーワードともいえる言葉が刻まれていたのである。太宰の兄は、小説『津軽』にちなんで、初めて碑を作ることを許したとされる場所なのであるが、この地が実は壇一雄の「火宅の人」の冒頭の場面に登場することを知っている人は少ないであろう。私も渡部先生に聞いて初めて知ったのである。後日本屋で「火宅の人」を覗き見てみると確かに書かれていたのである。こうした作家同士のつながりは、同時代を生きた人間同士の絆として、何らかの足跡を残しているらしい。宮澤賢治と高村光太郎のように。



ひばの木

風の音とカモメの鳴く声を聞きながら撮影が始る。太宰達は、この観覧山で酒を酌み交わしながら花見をしたと書いている。しかし、もう時期が終わってしまったのか、それともたいした桜が無いのか「みごと！」と叫ぶこともできずに、

やはり「淡い桜」という表現がぴったりの花見になってしまった。それにしても、当時もそれこそ花を捜すほどのお花見だったのではないだろうか。それとも、やはり「花よりお酒」だったのかもしれない。そんな想像をしながら、「それにしても、昔の人は優雅な暮らしをしていたんだな！」という羨ましい思いが言葉になってしまった。後で番組を見てみると、Sさんは抜け目なくこの台詞を番組にも組み込んでしまったのである。太宰のキーワード以上に、この羨ましがやけに印象に残った蟹田の町であった。



蟹田の町 観覧山から

松並木

この後、太宰達一行は、外ヶ浜（なぜ外ヶ浜と呼ぶのだろうか湾内に面しているのに）海岸を北に向かっている。当時はなかなか進まないバスでの旅だったが、我々は2台の車で本州の一方の北端へ向かっている。その途中、太宰達が潜り抜けたであろう松並木を通過しながら、当時の様子を想像してみた。現在は、バイパスがすぐ近くの山沿いを一直線に北へ向かっているため、この旧道の松並木を通過する車は、殆どが地元の車なのではないかと思った。Sさんは、車で走り抜けるシーンを撮影するためカメラのスイッチを入れながら、松並木を通り過ぎて行った。私と渡部先生もその後続いた。高野崎まではもうすぐである。

高野崎

小説『津軽』には、この岬は登場しない。しかし、我々はあえてこの岬を撮影することにした。ここからの景色が素晴らしいからである。岬の先端には海に下りられる所があり、岩と岩を結ぶ小さな橋も架かっている。岬の先端に向かって、右側には陸奥湾を挟んで下北半島が見え、正面には津軽海峡を隔てて北海道の大きな影。あの辺りが函館な

んだな。毎年、馬を見に（競馬場を訪ねて）函館へは訪れている。子供の頃からの遊び相手、そして夢の形「サラブレッド」が北海道で生まれ、その地を避暑地にもしている。今年も会いに行けるだろうか、私の恩人と言えるHさんの別荘が函館山の麓にある、などとぼんやりと眺めていた。爽やかな風が、ほんの一瞬の空白から目覚めさせた。そうそう、左手にはこれから向かう、太宰が鳥小屋と評した家並みが連なっているであろう竜飛岬が見えているのである。本当に爽快な景色にしばし時間を忘れてしまった。しかし、お腹は空いている。この岬の入り口に、売店兼食堂が営業しているような顔をしながらかまっている。今日の昼食はどこでだろうか。撮影の時の食事は、とにかく不規則と相場は決まっている。まず第一が撮影だからである。日のあるうち、つまり明るいうちに、撮影をあげてしまわないと次の日という言葉は無い。今日中に竜飛岬の先、小泊の町にある「小説『津軽』の像記念館」の撮影ができるのだろうか。時間がどんどん過ぎていく。昼食のことなど、だんだんどうでもよくなってきた。ただ、お腹は空いていた。

車窓からの三厩

我々は次の撮影地、竜飛岬まで急いだ。その途中『津軽』に出てくる今別、三厩を通り過ぎていった。それにしても私は、この三厩（みんまや）という名前を見たとき、どう読んでいいのか戸惑ってしまった。どうしてこんな名前が付いたかも分からなかった。しかし、その町を通り過ぎるとき、大きな岩肌に空いた3つの大きな穴が、馬屋として使われたことを想像でき、大きく肯いたのである。このシーン、できることなら撮影したいと思ったが、やはり竜飛岬の方が重要なシーンと判断して泣く泣く通過した。義経伝説の寺も同様に省略の憂き目に遭った。致し方ない。諦めよう。



三厩の岩穴

竜飛岬

太宰が「本州の袋小路」と評し、「鳥小舎に似た不思議な世界」とも評している本当に小さな村である。しかしながら、この岬は後に演歌の題材になったり、青函トンネルの基地になったりと最近ではかなり名前を知られている。太宰が旅をした頃には、そのどちらも生まれておらず、本当に寂しい岬だったに違いない。ただ、漁港としてはどうだったのであろう。津軽海峡の漁業基地として栄えていたのであろうか。当時も旅館があったのだから、多少は栄えていたことにしたい。旅館の名前は「奥谷旅館」。その旅館での太宰とN君の酒と歌の話には、何とも人間らしい味わいがある。

そうそう、そう言えば私が学生の頃、と言えばかなり昔（30年近く前）のことであるが、ある年の暮れも押し詰まった12月27日、私は上野駅から夜行列車（十和田5号だったと思う）に乗って秋田県の大湯という町へ出掛けたことがあった。夜行列車は、当時まだ盛んに行われていた「出稼ぎ（でかせぎ）」の人達が、正月を自宅で過ごしに帰るために満員となっていた。私はたまたまそんな列車にギターを持って乗り込んだのである。別に音楽を本格的に目指していたわけでもなく、特段上手く弾けるわけでもなかったが、宿泊先で時間をもてあそばない程度の小道具だったのである。ところがこれを見つけた同乗した人達は、流しの兄ちゃんが乗ってきたと言って早速宴会が始まったのである。故郷へ帰る安堵感と嬉しさは、私の心の中にも深く伝わってきた。飲めない酒を断りながら、列車の宴会はかなり続いたのである。

「旅を楽しむときに音楽があれば最高」などと旅人を気取るつもりはないが、この時ばかりは音楽がこれほど気持ちを通じ合わせるのかと感激したことを思い出す。

旅の折り返し地点、竜飛岬の宿の前で歌われる子供たちの手まり歌に安堵感を覚える太宰は、現代人が呼ぶ「癒し」と同じものだったのかもしれない。それだけ太宰は、人と人の気持ちを通じ合わせる感覚を感じ取れる人間であったと同時に、彼自身、作家という仕事に一つの壁を感じ疲れていたのではないだろうか。北端の地、自然の厳しい場所で「自分を見詰め直すこと」



竜飛岬 奥谷旅館

これが小説『津軽』の中に込められた太宰自身の大きなテーマであることがはっきり認識できた場所であった。私は撮影グループとは少し離れた場所に立ち、「太宰さん、手まり歌は聞こえないけどカモメの声が演歌に聞こえるよ」と独り言を言っていた。

風と立ち枯れ

竜飛岬の港から急な勾配の坂道を登り始めると、次第に津軽海峡が大きくその姿を表わしてくる。青函トンネルの工事は、我々の想像を遥かに超える一大プロジェクトであったことが、この景色からも想像できた。人間の凄さに驚きながら、一方では自然の凄さに脅えてしまっていた。その話は後にすることにして、我々は風力発電のプロペラが幾つも大きく回転しているのが見える展望地点で撮影を開始した。ここでは台詞無しで岬から見える大パノラマを思う存分撮影したのである。私と渡部先生の歩いている様子、会話している様子を背後から、そして下から見上げる形で撮影はされて



黄砂飛ぶ竜飛岬

いった。西に傾く日の光、小泊のある半島なども、例の捨てカットとして絶好の対象となった。時間は午後3時を回っていた。昼食はまだ取っていない。しかし、この雄大な風景を見ていれば、腹は減らない。嘘である。

バードウォッチングの人達が数人、渡り鳥達の「渡り」の様子を調べていたようである。双眼鏡とカウンター？カメラなどを持ち、鳥を待ち受けている様子に、思わず「お邪魔します！」と心の中で声をかけ「邪魔者の我々は直ぐ退散します」と頭を下げていた。この岬は風の岬である。撮影の合間にも風は容赦なくぶつかって行く。「この風はこんなに大きな津軽海峡を渡って北海道まで届くのだろうか」などという要らぬ心配をしながら、我々は小泊にある『津軽』の像記念館へ「予定より遅れて申し訳ないが、これからそちらに向かう」と伝えた。渡部先生の電話の様子からすると、快く待っていてくれるようである。一刻も早く向かわなければ……。昼食は遠のいた。

さて、先程私は「一方では自然の凄さに脅えてしまっていた」として、後程説明すると書いたが、実はその答えは、岬付近の木々の立ち枯れのことであった。誰かが「山火事の跡ですかね？」と言ったが、それほど酷い状態で山の木々が枯れてしまっていたのである。私の中途半端な知識でも、これは酸性雨に間違いないと感じた。こんな素晴らしい自然の中になぜ酸性雨が存在するのだろうか？もしかしたら、この酸性雨も「黄砂」と一緒にやって来るのだろうか？だとしたら、やはり環境問題は国境などという壁をさっさと越えて、地球全体の自然の生態系を確実に破壊しつつあるのだと実感してしまったのである。悲鳴を上げている木々の叫びは、きっと丸裸の状態にならない限り多くの人達には伝わらないのだろう。世界遺産のブナ森、白神山地も近い。本当に大丈夫なのだろうか？不安と言うより恐ろしさが頭の中を過ぎったのである。「太宰さん、あなたの時代は良かったのかも知れない。少なくとも酸性雨などという訳の分からぬものは、空からやって来なかった」。

太宰の時代、それ程昔とは言い難い頃であるが、岬にある展望台から遠く海岸線の向こうに見える小泊の半島へは、ろくな道も無く、彼らは来た道を引返したのである。しかし、我々は太宰の最終目的地、小説『津軽』のクライマックスである「たけ」さんを先に訪ねることにした。

小泊「小説『津軽』の像記念館」

日が傾きかけた頃、我々は小泊に到着した。もうとっくに昼食は諦めていた。『津軽』の像記念館もうすぐ閉館の時間である。ここでの目的は、主に太宰の子守である「たけ」と太宰と一緒に運動会を眺めている像の撮影であった。これが「津軽の像」なのである。この記念館は、『津軽』に書かれている運動会が行われた学校の隣にあり、その庭には、凛々しい表情のたけの像と、たけとは対照的に、何とも言えない安堵した表情



小説『津軽』の像記念館

が素晴らしい太宰の像があり、小説『津軽』と小泊の町との関係をよく調べ上げたものだと感心する記念館である。というよりも、町自体が小説『津軽』の一場面を想像させるように整備されており、この整備に携わったYさんのご努力に頭が下がる思いであった。撮影とは言えば、旅のラストシーンを想像しながらの渡部先生とのツーショットシーンであり、太宰への私の思いの移り変わりを表現する大切なシーンであった。

しかしながら、私も頑固なもので、この時点ではまだまだ太宰を受け入れない部分が多く、画面では少々困惑しながら話している。「太宰さん、私はあなたの発するメッセージが、どんなところからやって来るのか、あなたの子供の頃を見てみたくなってきましたよ…」。「この辺りでたけと太宰と一緒に運動会を見ていたらしい」という渡部先生の説明を聞きながら、私はキャッチボールで取り損なったボールを取りに来た小学生に向けて、軽く、しかし少し難しいショートバウンドのボールを投げ返していた。「ありがとうございます」どこかで聞いたような言葉とともに、何とも言えない懐かしさを感じた。しっかり練習しろよ！



Yさんの説明を受ける

金木から稲垣温泉へ

小泊での撮影を終え、我々は今日のノルマを果たした感じがしてほっとしていた。そろそろ日が沈みかけていた。名物のシジミが死んでしまうのではないかと心配するほど水の少ない十三湖を過ぎ、すっかり日が暮れた明日の撮影地、芦野公園を左に見ながら、金木の町を通り抜けた。今日の宿泊地稲垣温泉は、もう少し先にある。岩木川の堤防をしばらく走り、何とか間違わずに右に曲がると間もなく稲垣温泉に到着した。渡部先生の推薦するこの温泉は、歌手のYさんがときどき訪れるらしく、その痕跡が浴場等にも見て取れた。Yさんも「おらこんな村嫌だ…」などと歌っている割には故郷を大切にしている様子が伺える。津軽人特有の愛し方なのかもしれない。なぜならこんな気持ちを太宰の中にも感じられたからである。とにかくお腹が空いた。食事して下さい。と言い残すとすぐに荷物を置いて夕食に、いや遅い昼食にかかったのである。津軽半島をたった一日で回ってしまった我々を見たら、太宰は何というだろうか。「そんな奴は嫌いです。」と言われそうな気がして、ここでも少々後ろめたさを感じたのである。やはり旅は後ろめたいことが多いものなのかもしれない。学生時代の放浪などは、その最たるもので、旅先で関わった多くの人との「距離」を私は常に意識していた。旅はいろいろな意味で距離を確かめるものではないかと考えている。そしてその距離を間違えたときに、何となく後ろめたさを感じるようだ。今となっては夕食に何を食べたかも覚えていない。それだけお腹が減っていたのかもしれない。食べ終わったら風呂に入って寝るだけだ。ディレクターのSさんもかなりお疲れのご様子。おやすみなさい。

岩木川と津軽富士

太宰が生まれ育ったといわれる現在の太宰治記念館「斜陽館」の開館時間を目指して宿を出発はしたものの、何とも早すぎる出発であった。しかし、それが幸いしたのか岩木山の全景が初めてはっきりとした形で表れていた。この旅のキーワードは「人を喜ばせるのが…」であるが、もう一つの主役と呼んでもいい「岩木山」は、実はこの朝まできちんと見えず、遠い昔のように感じる一昨日、青森のアスパム展望台から微かに見えたのを最後に、この時まで存在感を表わさなかったのである。「絵になる山ですね」誰もが感じていた。さすがに津軽富士と呼ばれるだけのことはある。我々は、昨日通った真っ暗な土手を金木の方向へ戻りながら、背後の津軽富士に何とも言えない威圧感を感じていた。そのうちに車は土手の道から直角に



津軽富士

橋を渡り、反対側の土手へ向かった。岩木川を手前のアングルに入れながら、背景に津軽富士が画面に捉えられる場所を捜し車を止めた。津軽富士を見ていると、捨てカットどころか番組の冒頭にもなり得る映像が撮れることを容易に想像できたのである。「良い映像を撮りたい」。みんな同じ気持ちでいた。この岩木山の形は、初日の青森県近代文学館にあった写真と同じ形をしていた。渡部先生は「五所川原辺りからの写真だ」とおっしゃっていたが、おそらく同じぐらいの角度なのであろう。岩木山との距離が近いか遠いかの違いがあるだけなのだ。きっとここから岩木山の方向へ真っ直ぐ進めば五所川原へ出くわすに違いない。そんなつまらない地図を頭に浮かべながら、そうすると金木の町はと後ろを振り向いたが、そこからは町の位置は掴めず、馬禿山の人間の顔のような山肌だけが、妙にはっきり目に飛び込んできた。「この川は岩木川で、そこへ流れ込んでいるあの川が金木川、それからあの外国人の顔のような山肌が見えるところが馬禿山。その左側が後で行こうと思っている高流、高長根から取ったらしいと太宰も本の中で述べている。」渡部先生の説明が続く。確かに本の中にはそう紹介されている。しかし、私はといえば、馬禿山ははっきり分かったが、高流はどこなのか良く分からなかった。あの辺だ！ということだけで充分のような気がした。少々いい加減か？それとも昨日の疲れが残っているのか。いずれにしろ、斜陽館の開館時間までの間は、Sさん夫妻がどんなアングルで岩木山を映像にしているかが楽しみであった。

太宰治記念館『斜陽館』

やっと開館時間になった。「込み合いますから撮影は早めの方がいいです」という館長さんの言う通り、最初のうちは殆ど人がいなかった館内も、観光バスの到来とともに、人間の固まりが一気に押し寄せてきた。これも現実なのだろう。金木に来たら「斜陽館」なのである。固まりは、我々の撮影を珍しそうに眺めながらも、囲炉裏端に座り込んだK教育長さんの説明に耳をそばだてている。それにしても、立派な建物である。太宰ではなくても緊張する。もちろん我々は勘当された訳ではないので、太宰と立場は違うが、庶民がお大尽の御殿に招待されたような居心地の悪さがある。だって畳の部屋に庶民と主人とを区分けする段差があるのだ。太宰も自分を庶民と考えていた節があるから、我々と同じような感覚を味わっていたのではないかと勝手に想像した。また少し近づけた気がした。



太宰治記念館『斜陽館』

K教育長を二階の「斜陽の間」にお呼びして、修ちゃん（津島修治＝太宰の本名）の話聞くことになった。独特の津軽弁をできるだけ我々が聞いて分かるように語ってくれるKさんの優しさを噛み締めながら、なんともゆったりとしたインタビューであった。渡部先生は、放送時間が30分の番組にしては、極端に撮影時間が多くなっていることを心配して、インタビューを短めにと考えていたようであるが、この場面は、この番組の大きな要になると考えて、私は



館内の洋間

敢えていろいろな質問を矢継ぎ早にしていたのである。Sディレクターも、もしかしたらこの辺りから、1時間番組の構成が浮かんでいたのかも知れないが、何も言わずに我々の会話を撮り続けていた。そして私と渡部先生が、庭に出て会話している様子についても、敢えて池や木々、我々の後ろ姿といったいろいろな捨てカットも交えて、かなり多くの映像を撮ったのである。まだまだ撮影する場所は、山のように残っているはずなのに…である。我々の撮影協力には、金木町の助役さんや太宰の会の方も来て下さった。記念館にとっては混雑時の撮影など迷惑な話であろう。ご協力、ありがとうございました。ビデオが出来上がったら、一番で金木の人達に送らなくてはと決意を新たにしました。誠につまらない、大した決意ではないが。

雲祥寺

何故このお寺が撮影の対象になるのか、最初のうち疑問があった。確かに『津軽』の中にも、たけが太宰を教育するために恐い画を見せたことは書かれていた。しかし…と思っていた。ところが、ご住職に会って何故渡部先生が拘っていたのか直ぐに理解できた。実に魅力のある和尚である。本堂でコンサート（いなかつぺい氏）を開いたり、ホームページを開設して全国の人達と太宰をキーワードに話をしていたりと魅力十分なのである。ご本人も、若い頃はバンドを作っていたとかいないとか。「境内のあの観音様の像のお陰で、結構人が立ち寄ってくれるんですよ」と、まだ真っ白で真新しい像を指して嬉しそうに話してくれた。やけに歴史的な山門とこれからゆっくり歴史を刻もうとしている観音像が妙にアンバランスに見えた。多分100年も経てばしっかり決まっているのであろう。何となく津軽の明るさとゆっくりした時間が感じられた。「こんな所が太宰の遊び場だったんだな」などと納得顔で肯いた。私も子供の頃、お寺や天神様の境内で遊び場をしていた覚えがある。「私とそれほど違わないじゃないですか太宰さん！」もちろん、太宰が子供の頃遊んだであろうお寺の境内などは、今も御所車とともに残っている。私はそれを回して、逆回りにならなくなるまで何回もトライし、Sさんのカメラは撮り直しが続いた。逆に回ると縁起が良くないと聞いたからである。何回もトライして回し続ければ、たとえ順回りしたとしても御利益が無いだろうに。とにかく地獄絵図だけは撮り終えて、ホームページを見せていただいた御礼を和尚に言いながら、雲祥寺を後にしたのである。



雲祥寺

芦野公園

昨夜、公園の横を通り過ぎるとき「桜も散ってしまったか」と諦めていたのだが、八重桜を中心に、まだまだ最後の華やかさを見せていた。しかし盛りを過ぎた公園にはおお賑わいというほど人は出ておらず、少し寂しいながらも撮影には打ってつけであった。「最初に芦野公園駅の食堂で、お昼を食べましょう！」誰もが肯く提案であった。「オムライスが美味しい」という渡部先生のお勧めにより、全員オムライスを注文した。やはりに日本人である。「卵は柔らかめ、ケチャップはいらない！」などという注文はしない。全員「それでいいです」「私も…」となる。『走れメロス』の名を取った食堂で、純和



旧芦野公園駅



待望のオムライス

風の注文の仕方に少々苦笑いとなった。この食堂は以前駅舎にもなっていたそうで、時刻表が貼ってある。我々は、次の列車の時刻を見ながらの食事となった。桜の花びらが舞い散る中を走って来ては行ってしまう『走れメロス』号を見ていると、この公園が桜の名所に数えられても当然という気になっていた。小説『津軽』の中に出てくるモンペを履いた少女を想像させるシーン、これをSディレクターは、見逃さなかった。流石である。とにかく人、桜、駅、列車、どう組み合わせても絵になる、いや映像になる風景であった。オムライスでお腹がいっぱいになったところで、我々は公園の内部を撮影していった。渡部先生と私が公園を散策しているシーンは捨てカットにならない程度に重要で、桜の下を歩きながら楽しい旅を続けている様子を演出していた。次は高長根である。と言っても太宰と同じように弘前大学の農学部で宮様のかかわった碑を見ながら、一両編成の津軽鉄道の列車を手前に、そして津軽富士をバックに『津軽』を連想させる風景を映像に納めたのであった。

高長根（高流）

『津軽』に出てくるような、姪っ子の連れは無いものの、我々は太宰と同じように寄り道をしながら高長根にやってきた。残念ながら、現在はこの辺り一帯を造成中という感じで、少々当時の情緒はない。しかし、そこから眺める津軽平野の絶景は、全てを差し引いても満足できる代物であった。誰もが無言のうちに、ここが番組のトップであると確信し、文句を言う理由が見当たらなかった。今まで津軽の各地を撮影してきたが、この景色ほど津軽を明確に表わしている景色はないのではないか。それほどの絶景だったのである。私はこの景色が大好きになってしまった。いつか必ず大きなスケールの版画にしたいと考えたのである。造成地の高台にやっとの思いで這い上がり、カメラを据え、岩木山の左の麓（その向こうには白神山地）から木造町、金木町、十三湖を過ぎて小泊半島まで、岩木川を視野に入れながらカメラを振って行けば、津軽平野の全貌が納められるのであった。「ここは版画になる」と思いながら、その構図を写真にも収めた。「渡辺さん、その辺からだと前に邪魔な電線が入ってしまいますよ。ここからなら電線は入りません」渡部先生が、ご親切に教えてくださった。「ありがとうございます。ただ…、先生、私の写真は、絵を描くときの構図や色



高長根から津軽平野と岩木山を望む

の参考にするので、写真そのものの良さを考えているものではないんです。電線はあとで消してしまいますから」「あっ！そうでしたね」この話は、旅の途中何度も話題になった。渡部先生は、物凄い枚数の写真をどんどん、容赦なくという表現がぴったりなほど取り捲っている。それに比べて、私は1枚の写真を撮るのに、全体の構図、色合い、光の様子などを考えながら、せいぜい1場面を1カットか2カット、散々ファインダーを覗いたあげく、シャッターを押さないこともある。という写真の撮り方をしている。「色」だけを撮るために、単なる木の葉だけを撮ることもある。他の人が見たら、「これ、何を撮ったの？」ということになる。「撮り方が全然違いますね」と言って笑った。そしてもう一人、映像という視点でカメラを覗いているSさん、これまた同じ景色をレンズ越しに全く違った目で見ているのである。本当に面白い『場面』の捉え方の違いであった。とはいえ、私もかつてはカメラを担いで渡部先生のように撮り捲っていた時期があった。写真を写真として完成させたいと考えていた頃は、とにかく撮り続け、100枚の中から1～2枚良い作品があればいいと考えていた。被写体は、その多くが『馬』であったのだが。写真の世界もいろいろと楽しみ方があって本当に楽しい。

そんなことを思いながら、それぞれにいい画が撮れたと満足げな顔がなんだかとても愉快だった。やっとの思いで造成地の小山に登ったことも忘れていた。馬禿山が我々の小山の直ぐ隣りに見え、岩木川の河原で渡部先生が説明してくれた位置関係が、ようやく理解できた。人の顔に似ているという例の山肌が、全く似ても似つかない形で灰色の地肌をさらけ出していた。この山肌は、なぜ灰色なのだろうか？石灰岩が混じっているのか？化石でも出てこないのか？それとも岩木山の火山灰か？などと思い巡らしながら、もう一度津軽平野を脳裏に刻み付け、次の目的地、鹿の子川へ向かった。

鹿の子川

金木の町へ再び下り、もう一度別の道を通って今度は馬禿山の南裏手に伸びる川沿いに車を走らせて行くと、白い大きな家が丘の上に見えてきた。渡部先生が「あれが歌手のYさんの家です」と行ったので、後ろを走るSさんの車



鹿の子池

に白い家を指差して合図した。Sさんは何も分からず奥さんと二人でそちらの方向を見ながら、怪訝な顔をしていた。後で教えてあげようということで、車を止めずに山間へ入って行った。この道は、どこまで続いているのだろうか？山を越えて青森か、外が浜か、それとも行き止まり？結構いい道で、大きなトラックも通っていた。きっと何処かへ抜けるのだろう。しかし、太宰がピクニックをした頃は、どうだったのだろうか。峠を越えて、文化の違う町へ出て行った道だったのであろうか。いずれにしろ、当時ではあっても溜め池としての鹿の子池があり、その上流に鹿の子滝があったのである。鹿の子池には兄の名が刻まれた碑（当時からあったのであろうか？いや、それなら太宰が見逃すはずも無い。しかし、敢えて書かなかったのか、碑の建立日を見損ねてしまった。）が立っていた。我々は、その碑を撮影し、足早に滝を目指した。今にも何か出てきそうな深い滝壺に引き込まれそうな風景と、『津軽』に出てくる河原を渡る場面を想像すると、どうもアンバランスな感じがしていた。太宰は、どの辺りを渡ったのだろうか？答えは出ないまま、我々は金木最後の撮影場所、町の入り口にある大きな太宰の碑に向かった。

さよなら金木

撮影の定番とも言える金木町の入り口にある碑には、「金木は、私の生まれた町である」という『津軽』の一節が刻まれている。金木は、やはり太宰の故郷なのである。この碑を最後に車は南に向かい、左手後ろには馬禿山が名残惜しそうに振り返る我々を突き放すかのように見送ってくれていた。今度は違う季節に来てみたいと思いつつながら金木をあとにしたのである。金木は、本当にいい町であった。



馬禿山

既に日は岩木山の麓近くまで下りてきている。今日は昼飯を食べているので昨日ほど元気が出ない状況ではない。しかし、このまま弘前まで向かい、夜桜の弘前城を撮影すると、これまた夕食は忘れられかねない。まあ、それもいいか。と思いつつ、夕暮れの弘前、桜はどうだろうか？などと思いつつ、南に向かうに連れて形の変る岩木山を右手に見ながら最終目的地弘前に到着したのは、午後7時前であった。

夜桜の弘前城

やはり夕食は後回しとなった。早速、夜桜を撮影しに行くこととなり、カメラと三脚を重そうにぶら下げながら、人の少なくなった弘前城へ向かった。この旅の何処でもそうであったように、桜は一時の勢いを過ぎ、葉桜の手前まで来ていた。ところが面白いことに、桜情報の看板に何分咲きという表現だけではなく「何分散り」という表現があったのである。「7分散り」という書き方は、聞いたことがなかったのである。要するに7分以上散ってしまったということなのであろうが、所変われば…という表現方法であった。確かにソメイヨシノは、見事に散っていたが、枝垂桜は素晴らしい見頃であったことで、この撮影の最後としては大満足といえた。明日の昼間の撮影場所の見当をつけながら、今日のところはホテルへ戻り、その後は夕食が食べられる場所を探してうろうろすることになった。腹が減ったから何でもいいたいと言いながら、目では結構うるさく美味しそうな店を捜していた。結局、一軒の蕎麦屋に入り、カツ丼とざる蕎麦を注文した。お腹は一杯になった。



弘前城の夜桜

弘前城と桜で決断

翌日は朝から忙しく撮影を開始した。まずは弘前城へ向かい、弘前と太宰の関係を渡部先生にお話いただくシーンを撮影することになった。もちろん桜の下で行われた撮影は、他の見物人達の視線の的である。「青森テレビの撮影か？」通り掛かりに声を掛けて行く人に、そつと独り言のように「地元のテレビ局なら、桜が散ってからでは撮影に来ないでしょう」と言いながら、それでいて我々は、既にその視線や声を受け流せるほどリラックスして、インタビューに入り込めていた。桜があまりにも素晴らしかった所為かも知れない。朝方の雲が次第に切れ始め、岩木山が城の西側真正面に対座するように座っているのが見えた。ここもいい画になりそうである。Sさん曰く「今回のロケでは既に5時間ほどのテープを撮っています。30分にまとめるのは至難の業ですよ」私には切実な訴えに聞こえた。確かに3泊4日のロケ中、カメラを忘れた時間は殆ど無いに等しい。撮り捲っているというのが本音に違いない。捨てカットどころか、素晴らしい映像も沢山撮れているはずである。そろそろ番組を1時間に編集することを決断しないといけないかも知れない。私はそう考えていた。

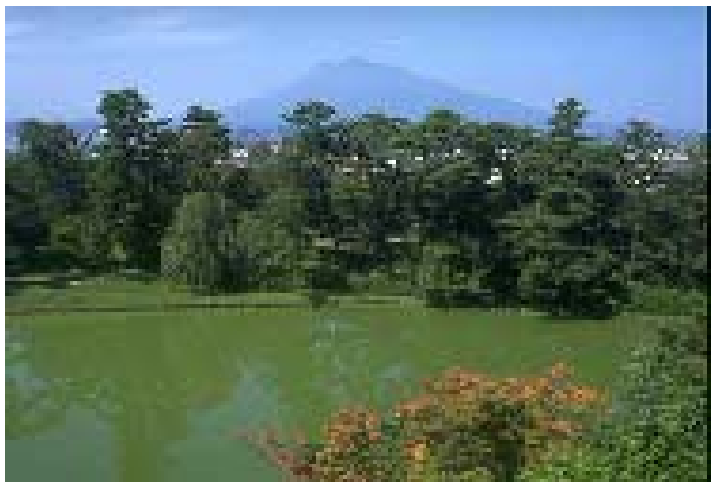


弘前城

それからの行動は早かった。テレビ局へ状況説明し、許可を貰うと同時に、他局の放送日程の調整などの確認もお願いした。返事はとりあえずテレメディアではOKとなった。他局への確認が必要だが、これもほぼ心配は無さそうである。これで心置きなく撮影できるであろう。とはいえそれでも映像が多すぎるか。城跡の後は、隣接する弘前の文学館にお邪魔して撮影させてもらったが、青森の文学館と内容的に同じような撮影テーマとなってしまったため、放送には加えないこととなった。ご協力して下さった皆さん、申し訳ございません。ここで少しお休み。昼食となった。

津軽人の心の拠り所「弘前」

いよいよ撮影も最終段階。りんご園と弘前大学、そして最勝院五重塔の3ヶ所を残すのみとなった。私は残されたこの3ヶ所、そして弘前城、弘前の町、これら全てが津軽に住む人達の心の拠り所になっていると感じ始めていた。弘前大学の庭にある碑には、太宰治の名前が津島修治の名とともに記載されている。太宰の青春時代、その文学的な才能を開花させた場所であり、しかも政治活動に挫折する大きな転換点を迎えた場所でもある。この大学も、現在では国立大学として、落ち着いた素敵な雰囲気漂わせているが、太宰が在学していた当時の状況を想像すると、昭和40年代後半、私が学生だった頃の学生運動の盛り上がり、その後の挫折とがダブってしまうのである。時代は隔たってはいるものの、ここでも何処か共通するものを感じるのはなぜだろうか。



弘前城からの岩木山

番組の最終場面に出てくる「りんご園」ここも弘前大学同様、小説には登場しない。しかしながら、津軽を表わすときどうしても欠かせないのがりんごの木であり花である。幸いにも桜の散った後に間もなくりんごの花が咲くらしい（本来は、その間に少し時間があるのかもしれない）が、ここでも異常気象なのか、例年に無いらんごの花の5分咲きを見ることができた。とは言っても桜が満開の頃だったら、おそらくりんごはまだ蕾だったに違いない。全く良い時期に来たものだ。こんな風に、全て良い方を取るのが私の呑気な性格のようだ。だから太宰と合わなかったのかも知れない。しかし、渡部先生に言わせれば「人を喜ばせるのが…」という一節から来る太宰の明るさ、

大らかさを理解して欲しいということになる。私はここまで来ても、まだ太宰を理解できないでいる自分に少々腹も立っていたのだが、ある風景を見たときハッと気がつき、そして自分の気持ちが落ち着いていく変化を感じていた。

りんごの花の向こうには、頂上の雲がどんどん無くなってきている岩木山の全様がかった。いつの日か、あの山にも登ってみたいという気持ちが湧いてきていた。目を南に転ずれば、遠く白神山地が呼んでいる感じがした。いずれは、白神山地にも足を伸ばして「もののけ姫」でも捜す旅と洒落こみみたいものである。そして、太宰と同じく温泉に入れば最高ということになるのだが…。りんごの花の向こうに、聳え立つ『津軽富士』。その木の影には、たけが笑って見ているような気がしてならなかった。太宰と同じように、何処か安心を求めながら旅をしている自分。人の心の大切さをいつも肌身で感じたい自分。人と話をしながら、その人の人生に触れ、自分の人生とダブらせながら旅をしている自分。どの自分を取っても、気持ちは、小説『津軽』の太宰に重なっていたのである。

唯一私と太宰とが異なっていたのは、彼が生みの親とは違う、心安堵できるもう一人の母親（たけ）を捜していたにもかかわらず、私には（たけ）に当たる家族がいつもそばにいたことで、旅において心の安堵を求める『人』を捜していなかった点だったのである14-15。そのことに気がついたとき、太宰に対するわだかまりが岩木山を覆っていた雲のように無くなり、この旅を心軽くなる旅として、ようやく終わりにできたのであった。

「太宰さん、やっとあなたの心が見えた気がします。そして通じ合えた気がします。私も頑固だから随分と時間がかかり、なかなかあなたを理解できなかったこと、勘弁して下さいね」。

それじゃこの辺でこの旅を終わりにしましょう。失敬！



最勝院五重塔

おわりに（エピローグ）

撮影は終わりを迎えた。最終の撮影場所、最勝院五重塔で最後の捨てカットを撮っていたとき、Sさんの携帯電話がなった。他局にも話を通じて、太宰の番組が1時間ものとして了解されたという知らせであった。我々はもうすっかり1時間番組として考えていたので、この電話は「そう言えば…」と思いつく電話となった。私はロケのメンバーだけではない人達が、陰になって対応してくれていたことを改めて思い出し感謝した。番組はやはり多くの人達の情熱があるからこそ生まれていくんだという実感が湧いてきたのであった。

ロケチームは解散した。渡部先生は「完全に晴れ上がった津軽富士をもう一度写真に収めたい」と、再び「りんご園」へ引返し、Sさん達は大鰐温泉の高速入り口を目指して一路東京へ向かった。かく言う私はといえば、弘前駅から青森空港行きのバスに乗り、暮れなずむ北国の空を夜間飛行という願っても無いシチュエーションで旅を終えようとしていた。小さな窓から暗くなった地上を見て「Sさん達は今ごろあの辺りだろうな」と他愛も無い想像にふけていたのであった。

写真協力： 渡部芳紀